



国司五条良遠の花押

すなわち、国司五条左馬権頭良遠が大野井庄・屋山保を知行し、新田氏が畠原下崎庄を、草野庄を大蔵一族が知行しており、「近年、御所の御手に属す人々、少分の土貢を出して、莫太の神事仏会料足を抑留せしむ」と訴えられた（『八幡善法』寺文書）。

九州探題

斯波氏経

正平十六年十月、新探題斯波氏経が豊後府中に着船し、大友氏時の楯籠る高崎城に入り、豊前進出を狙った。翌年八月、氏経・氏時軍は筑前の麻生氏、松浦党とも示し合わせて、豊前に侵入して、守護代武尚らと中豊前で戦い、守護又代官以下の部将三〇余人、計七〇余人を討ち取って、豊前一国大略降参して味方になったと阿蘇大宮司惟時へ報じた。氏経は貞治二年（一三三三）、周防の大内弘世を幕府方へ招き、筑前に侵入し、弘世の在国中は形勢がよかったが、帰国すると元に戻ってしまい、氏経の九州経略は失敗して京都へ帰ってしまった。

このころ、京都郡津隈弁分では、赤孫四郎・柳田頼範が薬丸・三郎丸・小屋敷名を押し妨している。宇佐宮惣検校益永内輔に訴えられ、国司五条良遠が久下七郎入道に命じて益永方へ打ち渡させた。四年後には宇都宮守綱の家来薬丸三郎左衛門尉が弁分内丸名を違乱していると訴えられ、守綱の返答を求めたが音沙汰がないので久下七郎入道へ催促を命じている（宇佐『益永』）。武士による荘園侵略が活発で、庄園領主側に立つ南北朝方の国司や守護は、自身も任国内に経済拠点を確立する必要もあって旧勢力と対立するという矛盾に苦悩を深めていた。

四 九州探題今川了俊

豊前守護

今川氏兼

応安三年（一三七〇）、九州探題に任命された今川了俊は、豊前・肥前・筑後・肥後・日向・大隅の守護職と備後、安芸両国守護職をも与えられ、翌四年、京都を出発し、備後尾道において、中国・九州の御家人に協力を依頼し、子息治部少輔義範を豊後の大友親世の拠る高崎城へ送り、豊前宇都宮一族野仲郷司（政道カ）の居城（長岩城カ）へ弟の弾正少弼（霜台）氏兼を、肥前松浦に弟頼泰を先発させて松浦党一揆を組織して、豊後と肥前方面より太宰府に迫る作戦をとった。自身は安芸・備後の武士を率いて、正面より豊前門司に渡り、博多から太宰府を攻略することにした。了俊が、この年十二月、門司に渡り、赤坂（小倉北区）に陣をとると、宇都宮経景らに加わり、翌応安五年二月、大内弘世・少弐冬資等をもって麻生山（八幡西区）・多良倉・鷹見岳を攻め落とさせた。

今川了俊関係系図



高崎山の合戦

肥前の頼泰は、長島庄（武雄市）から蟻打を経て、高宮（福岡市）の了俊の軍に合流したが、豊後の義範は、菊池武光軍に包囲されて、百余度の合戦を繰り返すほどの苦戦で動きがとれなかった。了俊の渡海を知った武光が太宰府へ帰還した後、大友前惣領氏継が南朝方に転じて、豊後南部で対立したため、義範の博

多合流は遅れた。この年八月、有智山城・太宰府は了俊に攻略されて、懐良親王・菊池武光らは筑後の高良山（久留米市）へ退いた。了俊に中国から同行した大内弘世らは帰国した。

応安六年、南朝方の支柱菊池武光が死亡し、南朝方は日を追って弱体化していった。



九州探題今川了俊の花押

城井守綱の乱

ところが、応安七年正月、城井常陸前司入道が築城郡高畑城に挙兵した。高畑の地名は松丸に残っているという（稲葉伴吉『豊前郡土史論集』）。この常陸前司入道を『豊前守宮興亡史』（小川武志、九八八年刊）は八代直綱とする。父の家綱が「応安三年八月九日、京都において卒す、六十歳」と『紀井系図』にあることによるらしい。

『紀井系図』には、直綱は管領細川頼之と不和で、そのため、公方義満からも疎まれたとある。川添昭二氏も直綱としていたが、その後、守綱のことかとされ、山口隼正氏は守綱としている。『紀井系図』は通房のことも誤りを記述しているごとく、そのまま信することはできないからである。

ここでは守綱として論をすすめる。

城井守綱は、東国守宮貞綱の子で、出生後間もなく頼房の子として養育され、頼房の実子春房・公景・隆房等をさしおいて家督を嗣いだという。守綱もまた、実子重綱・房綱等をさしおいて、東国公綱の子家綱に家督を譲ったという。なぜであろうか。関東の惣領権が九州にも強く及んでいたのであろうか。守綱は建武中興ごろ大和弥六左衛門尉高房と

称したが、やがて常陸介冬綱と改名し、豊前の守護となった文和三年（二三五四）ごろ、守綱と称するようになった。鎮西探題北条英時滅亡の時は豊前国の武士を率いて博多を攻め、尊氏再上洛後は筑後国守護をずっと務め、少弐頼尚が南朝方に転じたとき、豊前の守護職に補任されたが、一年間ほどで、懐良親王に屈した。その後、大保原の戦いの前、大友氏時・少弐頼尚と共に幕府方に寝返ったが敗北し、以後は幕府方と南朝方を反復して所領を減少させたらしい。

応安七年（二三七四）二月、豊後の守護大友親世は国東郷の田原氏能へ「城井を焼き払い、守綱らを城郭に追い入れたから、早く参陣せよ」という催促を行った。これに応えて氏能は二月二十三日より出陣し、連日の野戦のぶせで三月三日に四人、同二十八日に二人、八月十三日に七人と、被官の負傷者を出した。この時の城井陣とは高畑城付近をさすらしい。そこへ八月末日、氏能の本拠地国東郡の南朝方が蜂起して花嶽（豊後高田市、標高五九三メートル）に城郭を構え豊前・豊後の通路を遮っているので討伐せよという命令を豊前守護今川氏兼から受けて、九月六日一挙に攻め落とし、城井の陣へ戻り、九月二十五日、守綱が高畑城を落ちて行くまで、今川氏兼のお供をした。この合戦には備後の長井貞広も参加し、自身と若党が負傷している（『福原』）。

守綱の籠城が正月より九月まで八か月もの長期に及び、これを豊後の南朝方大友氏継や田原前惣領家一族直平等が支援して国境の通路を押さえたが失敗したのである。一貫して幕府方として行動してきた守綱が、今川了俊に反抗したのはなぜか。今後の究明に期待したい。

少弐冬資の暗殺

守宮常陸入道が高畑城を没落したあと、翌永和元年（一三七五）、筑後川を渡って、肥後に陣を進

めていた了俊は、隈府の手前水島（菊池郡七城町）の陣に少弐冬資を招き、宴の最中、暗殺した。冬資が了俊に対して、必ずしも協力的でないことが原因であったが、この時、仲介して冬資を出陣させた島津氏久は面目を失って帰国してしまい、以後、了俊に対して徹底して反抗的な態度を取りつづけることになり、了俊の北九州支配は安定するものの、南九州制圧には二〇年を費やすことになる。

大友親世もまた帰国してしまったため、隈府を目前にしながら、了俊は水島を退き、筑後川の線まで撤退して体制を立て直しをしなければならなくなった。

少弐冬資が了俊に対して好感情を抱かなかったのは、父頼尚が建武中興以来、三〇年間保持していた筑前・豊前・肥前・筑後・肥後等の守護職や諸所の地頭職の大部分を失い、筑前一国のみの守護として、領国化をすすめていたところを、本所領家側の訴えにより、了俊からしばしば抑制され、また太宰府の現地最高責任者としての職務が、探題によって大きく奪われたからである。宇都宮常陸入道の挙兵も同様の理由であったかとも考えられる。

ともあれ、少弐冬資の滅亡と島津氏久の帰国・離反によって、了俊は豊後を除く八か国の守護職を自由に任免できるようになった。この権限を駆使することによって、九州の地頭御家人を統制し、南九州統一を進めることになった。

水島撤退後、南九州制圧のために、了俊は弟頼泰を肥前から肥後の守護に遷し、氏兼を豊前から日向の守護に替え、豊前の守護職を大内義弘に与えることを条件として協力させた。その場合、幕府からの命令は了俊↓守護↓使節（国人）という順序で下達される。あくまでも、了俊が

守護であり、守護は了俊の代官的な存在であった。

豊前における了俊の活動は、宇佐宮に対して、大宮司宮成公居を敵方の仁として解任し、その甥公範を推挙し、造営について、明徳元年（一三九〇）、下宮の造替を、豊前国神領からの反銭をもって行おう、守護大内義弘に催促させた。造替奉行には、了俊の家臣岩部宗宣を充て、在宮して料物等の引き渡しを行わせた。宇佐宮造営は一〇〇年ぶりのことであり、これを可能にした了俊の功績は偉大とすべきであろう。

弘和三年（一三八三）三月、懷良親王が死去し、島津氏久も元中四年（一三八七）閏五月没し、南朝方の良成親王も隈部城を出たあと、染土城を経て、宇土・八代と居所を移し、最後は筑後矢部に、五条氏・黒木氏に守られて隠れ住むに至って、了俊の九州統一事業は終了した。

今川了俊の解任

こうして明徳三年（一三九二）十月、義満の斡旋によって南北朝の合一が成った。この前年、義満は六分一殿といわれた山名氏清を滅ぼして、その領国を削り、室町幕府の全盛時代を現出した。山名氏の次は、今川了俊がその勢力を警戒されて京都に召喚された。大友親世や大内義弘の讒言をうけ、細川頼之と対立していた管領斯波義将も、義満を説得して了俊を更迭し、親類筋の渋川満頼を九州探題に推挙したという（『平記』）。当時、了俊は安芸・豊前・筑前・肥前・筑後・肥後・日向・大隅・薩摩九か国の守護職の推挙権を握っており、幕府にとって、これ以上了俊を九州にとどめておくことの危険を考えていたのである。